

<随想>時雨に会う：川端茅舎と正覚庵

著者	中嶋 秀子
雑誌名	日本文学誌要
巻	27
ページ	85-86
発行年	1982-12-05
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019353

時雨に会う

—川端茅舎と正覚庵—

「追って私も十一月五日より兩三日、物故同人追悼忌のため西本願寺へ参ります。ついでを以て東福寺へも参ります。時雨に会いたいものと念じております。」

という三行をもって、岩下鱧氏の手紙は結ばれていた。岩下氏は、俳人川端茅舎の直門の弟子で、茅舎の最期を看取った一人である。私が茅舎について書いた文章を読まれ、文中に引用した茅舎の句の誤植を正して下さったのが縁で、茅舎について教えて頂いているわけだが、直接お目にかかったことはまだない。

今日は、十一月七日、久しぶりの雨音を聞きながら、美しく紅葉した東福寺境内を、正覚庵に向って急いでいる岩下氏の姿を想像した。岩下氏が、時雨に会いたいと手紙に記されたのは、十月下旬、私が正覚庵を訪れた時、折よく時雨が降りはじめ、しばしば髪に肩に冷たい雨がかかった。そしてその時雨に濡れながら、正覚庵境内にある句碑の

通天やしぐれやどりの俳諧師 茅舎

に会うことが出来たよろこびを、葉書にしたためて、岩下氏に送ったことへの返礼である。

中 嶋 秀 子

もっとも、十月の時雨は「秋時雨」と呼ばなくてはならないのだが、十月も後半になると、晩秋から初冬の気配が濃いから、も早や「時雨」と呼んでも、そう見当外れともいえないようだ。暦の上では十一月から冬、「時雨」は、ずっと降ってさつとあがる冬の雨を指す。それに対して、「秋の雨」「秋雨」^{あきさめ}「秋霖」^{しゅうりん}「秋霖雨」^{あきつり}は、切れ目なしに降る梅雨の長雨にも似た趣きがある。夏の梅雨に対して、どこか肌寒く、もの哀しさがつきまとうのも秋なればこそであろう。最近、テレビの天気予報で、この「秋霖」を、春の「菜種梅雨」に比して、「山茶花梅雨」^{さざんかづゆ}と呼んでいるのを聞いて感心した。山茶花ほどはかなく、もろい花も少ない。桜の花の散り方には、いさぎよさと共に豊かさがあるが、山茶花は、咲く時も散る時も、何か冷え冷えとしたものがある。詩仙堂では、くっきりと箒目をつけた白砂の上に、静かに山茶花の花びらが散りつづけていた。まれに見る大樹であったが、散るためにのみ咲いているように見えた。それにくらべて山径に根を下した野性の茶の木には、耐えることを本分と心得えてでもいるように、うつ向いてはいるが、強靱な茶の花が開きはじめていた。秋から冬への花の無言の引継ぎの儀である。

そうした微妙な空間を埋める雨を「山茶花梅雨」と呼ぶ、山茶花に新しい生命のきらめきを与えられたようだ。

さて、時雨降る正覚庵の境内に入って、先づ私の眼を奪ったのは、桜色に紅葉した帚草であった。全長三十センチ、直径も二、三十センチ位のこんもりとした帚草は、どこから見てもまろやかで、薄紅に染まっていた。日の射さない禅寺の庭に、点在するその帚草は、桜色をした水母が海底を浮遊しているように見えた。帚草と呼ぶには、あまりにも神秘的な美しさであった。他の場所でも、紅葉した帚草は見かけたが、正覚庵の美しさを越えるものは一株もなかった。時雨が通り過ぎる度に紅葉は進むのだろうか、あの帚草の色は幾度時雨が通り抜けて行って染められたもののだろうか。自然の妙手に唯々感嘆の声を洩らすのみである。

正覚庵には、現在も八十六歳の長寿を保って、平住^{ひらすみ}温洲老師が静かに余生を過されている。川端茅舎が、しばしば東京からこの寺へ出かけて来たのも、平住老師が居られたからのようだ。大正十二年九月の関東大震災の後、茅舎はこの寺で暮すようになる。茅舎の作品に難解な仏教用語が使われるようになるのは、この体験があったからである。茅舎の第一句集『川端茅舎句集』（昭和九年十月四日、玉藻社刊）は、まさにこの震災による東京脱出のその日から昭和八年八月迄の十年間の作品の中から三百句抜粋して編まれたものなのである。この『川端茅舎句集』の冬の部は、七十二句の俳句が並んでいるが、その中の約三分の一に当る二十四句が、「時雨」の句なのである。しかもそのいずれも東福寺界限での作品と思われるのである。東京育ちの茅舎にとって、京の時雨は、ことの外魅力があった。

たのだろう。もっとも、茅舎は、「時雨」の他にも、秋の部では「露」の句を二十六句も作っていて、その中には

白露に阿吽の旭さしにけり

白露に金銀の蠅とびにけり

ひろくと露曼陀羅の芭蕉かな

桔梗の露きびくとありにけり

金剛の露ひとつぶや石の上

等の名吟が含まれているが、やや戯作的な面が強く出ている危い作品も入っているのである。

ちなみに、「時雨」の二十四句を、全て左に列記して見ると

△しぐるゝや僧も嗜む実母散△△湯ぶねより一とくべたの時雨
かな△△時雨るゝや又きこしめす般若湯△△涙ぐむ粥あつゝや小
夜時雨△△夕粥や時雨れし枝もうちくべて△△鞘堂の中の御霊屋夕
時雨△△しぐるゝや粥に抛つ梅法師△△袖乞のしぐれながらに鳥辺
山△△時雨来と水無瀬の音を聴きにけり△△かぐはしや時雨すぎた
る齒朶の谷△△通天やしぐれやどりの俳諧師△△しぐるゝや目鼻も
わかず火吹竹△△酒買ひに韋駄天走り時雨沙弥△△しぐるゝや笛の
ごとくに火吹竹△△梅擬つらゝ晴るゝ時雨かな△△しぐるゝや日
がな火を吹く咽喉仏△△しぐるゝや閻浮壇^{えんぶだん}金の実一つ△△御僧や時
雨るゝ腹に火葉めし△△時雨来と栴檀林にあそびをり△△しぐるゝ
や沙弥竈火を弄ぶ△△小夜時雨△△時雨鳩わが肩に来て頬に触れ△△花を手
に浄行菩薩しぐれをり△△

ということになる。

——この稿続く——（一九六二年卒）